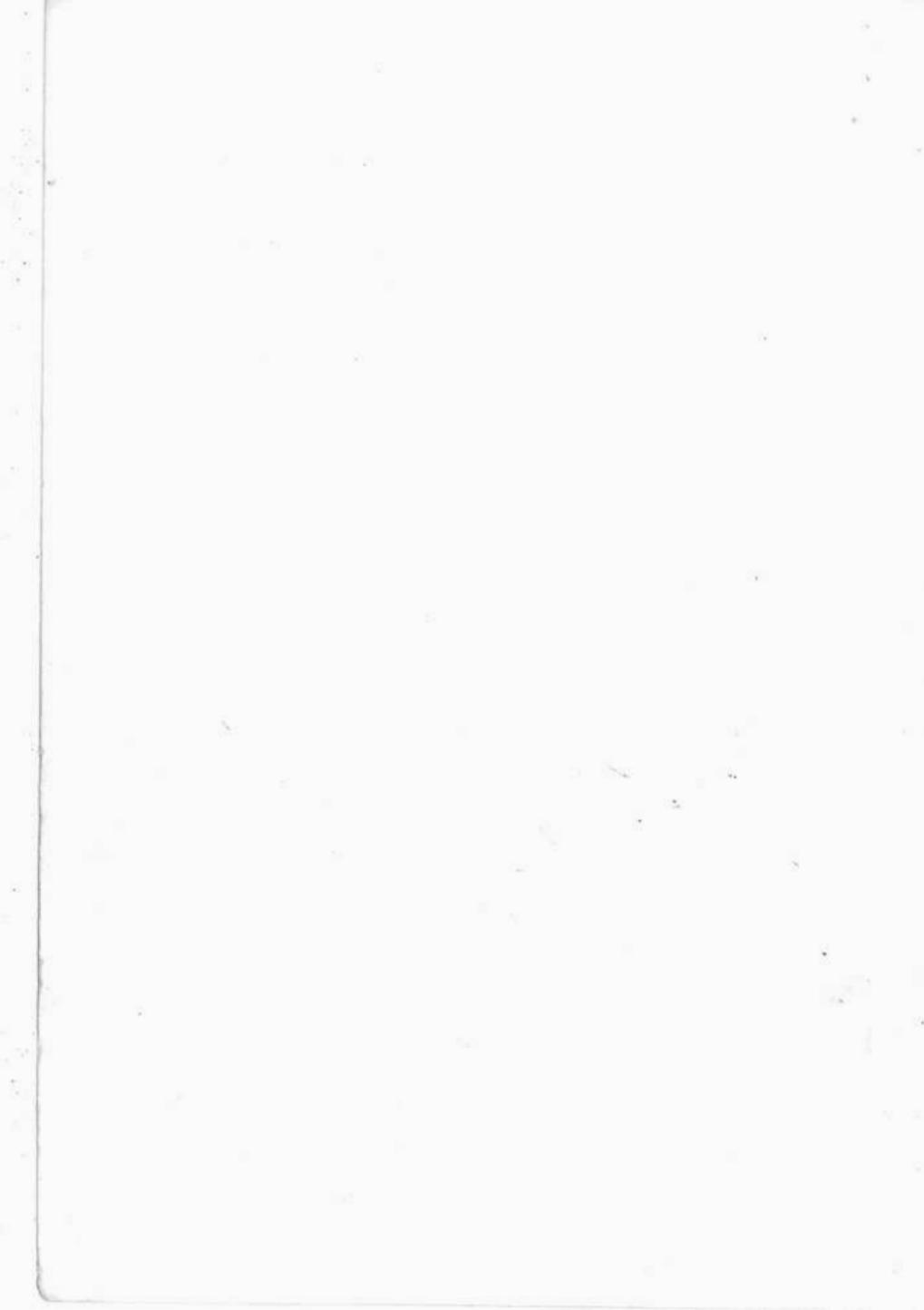


柳久保遺跡群Ⅱ

——城南住宅団地造成地区内確認調査報告——

1985

山武考古学研究所



柳久保遺跡群 II

——城南住宅團地造成地區內確認調查報告——

1985

山武考古学研究所



序

前橋は、上毛三山の一峰赤城山を背に、坂東太郎で名高い利根川が市域の西部を貫流している。春、柳の緑の樹間にさまざまな花が咲き誇る詩情豊かな広瀬川が市街地を流れている。水と緑にあふれ、また、四季折々の自然の変化を享受できる県都である。

人口27.5万余の都市として躍進している前橋は、文教都市の実現を期し、秩序ある都市づくり、調和のとれた農・商・工業等の産業振興、幸せな暮しづくりの実現、急激な社会構造の変化に対処する施策の具現化に努めている。

幸せな暮しの施策の一環として、赤城山南麓の城南地区に住宅団地造成計画が策定された。それに伴い事前に発掘調査、確認調査を実施することになった。

住宅団地造成地は、20haに及ぶ広大な土地である。そこで、緊急度の高い宮川の河川改修部分、幹線道路部分の発掘調査を前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した。

確認調査については、山武考古学研究所の協力を得て実施した。その結果、遺跡の分布範囲、遺構の性格等の資料が得られた。

確認調査結果を充分検討することにより今後の発掘調査の方法、年次計画を策定する基礎資料とするものである。

本報告書を刊行するにあたり、物心両面からの援助、協力をいただきました前橋工業団地造成組合に厚くお礼を申し上げます。

また、確認調査に際し山武考古学研究所の所長をはじめ担当者、関係者、作業員の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

本報告書、調査方法が斯学の発展のため少しでも寄与できれば幸いに存じます。

昭和60年2月28日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 奈 良 三 郎

例　　言

1. 本書は前橋市荒子・荒口町に所在する城南住宅団地造成予定地内における柳久保遺跡群の確認調査報告書である。
2. 調査は前橋市工業団地造成組会（管理者　清水一郎）の依頼により前橋市教育委員会指導のもと山武考古学研究所が担当した。
3. 現地調査は山武考古学研究所調査研究員折原洋一、近江屋成陽、芦田和義が行なった。
4. 本書の遺物、図面の整理は折原洋一、近江屋成陽、芦田和義が担当し、平山史子、片岡美知子に協力を得た。
5. 本書編集は折原洋一が行ない平岡和夫が総括した。
6. 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の機関、諸氏の御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第であります。

群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市教育委員会、前橋市工業団地造成組会、中央航業

凡　　例

1. 本遺跡群内における各遺跡の略称は次の通りである。

E 1 = 下鶴谷遺跡	E 2 = 柳久保遺跡	E 3 = 源訪遺跡
E 4 = 中鶴谷遺跡	E 5 = 頭無遺跡	E 6 = 柳久保水田遺跡
2. 遺構、遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

トレンチ設定図1/2000、遺構配置図1/500、土器1/3、石器1/3、一部の石器1/2
古銭1/2
3. 各遺構の略称は下記の通りである。

H = 住居址、D = 古墳時代以後の土塙、J D = 縄文時代の土塙、W = 溝、K = 窯状遺構
4. 遺構配置図（付図1・2）のスクリントーンは旧石器の遺構・遺物を調査するための試掘トレンチである。
5. 遺跡別遺物出土量表はトレンチ単位に並べた。

目 次

序章

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の概観	2
第1節 位置と環境	2
第2節 周辺と遺跡	3
第3節 分布調査	4
第3章 調査の概要	5
第1節 調査と方法	5
第2節 標準土層	5
第3節 調査日誌	8
第4章 各遺跡の概要	9
第1節 下鶴谷遺跡	9
第2節 柳久保遺跡	11
第3節 谷訪遺跡	14
第4節 中鶴谷遺跡	15
第5節 頭無遺跡	17
第6節 柳久保水田址遺跡	19
第7節 遺跡別遺物出土量表	21
第5章 まとめ	27

挿図目次

第1図	柳久保遺跡とその周辺	2
第2図	遺跡の分布区域図	5
第3図	時代別分布図	5
第4図	トレンチ設定図	6
第5図	標準土層図	7
第6図	下鶴谷遺跡出土遺物	10
第7図	柳久保遺跡出土遺物(1)	12
第8図	柳久保遺跡出土遺物(2)	13
第9図	諏訪遺跡出土遺物	14
第10図	中鶴谷遺跡出土遺物	16
第11図	頭無遺跡出土遺物	18
第12図	柳久保水田址遺跡出土遺物	20
第13図	遺構・遺物分布区域図	28

表目次

第1表	下鶴谷遺跡出土量表	21
第2表	柳久保遺跡出土量表	21
第3表	諏訪遺跡出土量表	22
第4表	中鶴谷遺跡出土量表	23
第5表	頭無遺跡出土量表	25
第6表	柳久保水田址遺跡出土量表	25

図版目次

図版1	調査前遺跡群全影
図版2	調査後遺跡群全影
図版3	1. 柳久保遺跡住居址確認状況 2. 柳久保遺跡住居址確認状況
図版4	1. 中鶴谷遺跡古墳現況 2. 頭無遺跡土坡内遺物出土状況

第1章 調査に至る経緯

昭和57年12月に、前橋市工業団地造成組合（管理者 清水一郎）から、「荒砥中学校の北西20haの区域に住宅団地を造成するので、埋蔵文化財の有無について調べて欲しい」との依頼が教育委員会にあった。

この土地は、上毛野君の墳墓と考えられる三基の大形前方後円墳をはじめとして、数多くの古墳等が存在し、古代史の中でも、とりわけ重要な地と考えられて来ている。周辺地域は土地改良事業の実施に伴って昭和49年から発掘調査が大規模に展開されており、現在も継続中である。その成果は年々、報告されつつあり、先史から、多くの人々の歴史が刻まれている事が判明してきている。

そこで教育委員会は、昭和58年1月末日に、城南住宅団地造成予定地内の遺物分布状況を緊急調査した。その結果、台地上のはば5ヶ所に良好な遺物包蔵地、谷地には、他遺跡の成果を鑑みて埋没水田跡が推定され、これらを合わせた遺跡総面積は110,000m²におよぶことが予測された。

一方、城南住宅団地造成事業は、昭和59年に造成工事が予定されていたため、教育委員会としては、次のように対処をした。まず、遺跡がきわめて広大なため、遺跡の範囲や内容を把握するために試掘調査を実施し、その結果をもとにして発掘調査計画をたてる事を回答した。当初、試掘を昭和58年度に予定していたが、用地買収等の遅れがあり、58年度は調査坑の設定、現況測量図を業者発注にて実施した。

昭和59年度になってから調査依頼方があり、いよいよ正式に対処せざるを得ないこととなった。しかし、試掘と併せて道水路部分の発掘調査の依頼が提出されたことと、遺跡面積が広大であること、調査体制が不備なことから前橋市工業団地造成組合と市教育委員会との間で、緊迫した協議が続けられた。調査を担当する教育委員会としては、他の公共事業に伴う発掘調査の依頼も受理しているため、調査を遂行する組織づくりが問題となった。市の上層部を含めて、職員増員や組織づくりについて会議が何度もたれたが、話合いは難行した。どれをとっても簡単に解決できる問題ではないが、文化財の負っている価値や、今までの市教育委員会の文化財行政への取り組み方からしても、一歩前進した姿勢のうえに立つことが切望された。

しかし、決断が下されないまま、時間的制約等のため道水路部分の発掘調査については市教育委員会が昭和59年7月16日から始めることになり、12月末に完了した。試掘調査については、市教育委員会の指導のもとに民間発掘調査機関である千葉県の山武考古学研究所が、昭和59年10月から着手し、翌60年2月に終了した。この調査の結果にもとづいて、今後の調査期間、調査体制を検討する話し合いが予定されている。市教育委員会では、芳賀東部北部・西部で大規模な調査の試行錯誤は経験をしており、それを生かしながら、迅速に調査を進め、成果を一般市民に還元していく方法を模索しなければならない。

(前原 盛)

第2章 遺跡の概観

第1節 位置と環境

本遺跡群は赤城山の南麓にあり、標高が109m前後、赤城南麓台地上の荒砥川の左岸段上に位置している。大間々扇状地と前橋台地にはさまれたこの地域は第四紀洪積統に属し、関東ローム層が厚く堆積し、それを中小の流れが南北方向に分断している。段丘面は3段に分けられ、遺跡付近は第四紀降下軽石BP・HPの分布界に入っている。

利根川低地を隔てた同じ洪積統の前橋台地の構成物質は大部分が火山流出の泥流堆積物で段丘疊層は小範囲にとどまる。大間々扇状地の上位面は武藏野ロームが堆積しているが、下位面は立川ロームに覆われている。

遺跡の地形は中央部に宮川の本谷が南北に走っており、この支谷より北東および北西に延びる支谷が発達している。このため、台地は支谷により分離されている。これらの各台上に下鶴谷、柳久保、諏訪、中鶴谷、頭無の各遺跡が、また宮川の本谷には柳久保水田遺跡が存在している。遺跡の区分は宮川の谷により分けられているが、同一台地上に存在する諏訪遺跡と下鶴谷遺跡は表面採集による遺物の分布状況によりY=145の南北で分けられている。



第1図 柳久保遺跡群とその周辺

第2節 周辺の遺跡

本遺跡群の周辺には、旧石器時代から平安時代に至る遺跡が点在している。

旧石器時代はポイントを出土した北三木堂遺跡がみられ、その他の遺跡は現在のところ明らかではない。

縄文時代

荒砥北原遺跡や八光遺跡、上の坊遺跡など中期を中心とした集落址が検出されており、他の時期の遺跡は現在のところ明らかではない。

弥生時代

昭和59年群馬県教育委員会により発掘調査された頭無遺跡（本調査区より西方）で、中期後半の住居址が3軒検出されている。また本遺跡群周辺に中期末から後期にかけて集落址が点在しているが、遺跡数は少ない。

古墳時代

遺跡数の増加がみられ、古墳や集落跡が顕著である。古墳は東神沢流域の前二子古墳を主体とし、荒砥川流域や神沢川流域に小円墳が数多く分布する。しかし宮川流域やその周辺には少ないという特徴が窺える。近隣の遺跡として昭和58・59年度に群馬県教育委員会が発掘調査している。(注1) 諏訪遺跡（本調査区の西方）では、弥生時代から古墳時代にかけての方形周溝及び溝5条が検出された。諏訪西遺跡では、竪穴石室の古墳が1基と、前期から後期にかけての住居址が11軒検出されている。柳久保遺跡（本調査区の西方）では、竪穴と横穴石室の古墳が各1基と後期の住居址4軒を検出し、また堤東遺跡では、古墳時代初頭のものとみられる前方後方型周溝墓が1基検出されている。頭無遺跡では後期の住居址1軒を検出し、柳久保遺跡では、後期の住居址が3軒検出されている。

奈良・平安時代

遺跡数は更に増加し、周辺では堤東、川籠階戸、大久保の各遺跡が発掘（註1）され、堤東遺跡にて住居址13軒、川籠階戸遺跡では、すべて東壁にカマドをもつ住居址63軒、大久保遺跡でも住居址50軒が検出されている。さらに荒子小学校の北方には古瓦等が出土した寺院址もあり、本遺跡群の周辺には上記以外にも集落址が点在している

以上のようにこの地域は旧石器時代から弥生時代にかけて遺跡数は少ないが、古墳時代から歴史時代にかけて、遺跡数の極めて増加することが指摘されている。古代人の生活にかなう地域であったと考えられる。

(近江屋)

注1 昭和58年度 荒砥北部遺跡群発掘調査概報 群馬県教育委員会

昭和59年度 荒砥北部遺跡群発掘調査概報 群馬県教育委員会

第3節 分布調査

昭和57年12月に前橋市工業団地造成組合（管理者 清水一郎）より城南住宅団地造成にかかる埋蔵文化財の有無についての照会があった。これに基づいて昭和58年1月28日に市教育委員会文化財保護系職員8名で約20haの予定地に踏査を行った。

踏査は、耕作地1筆毎に1区画として、結果を地籍集成図（2500分の1）に記入する方法で実施した。地籍図に基づいて、1筆毎に採集した遺物を、地番を記入したラベルとともにポリ袋に入れて持ち帰った。また、既刊の遺跡台帳、古墳綜覧等の照合、検討を行った。

整理作業は、表採遺物を水洗し、地番毎に、遺物の種類・時期・数を記したリストを作成した。

次に2500分の1の現形図を用意し、上記のリストと地籍集成図をもとに、散布範囲と時代別分布図を作成した。

以上のような作業工程で遺跡範囲の把握にあたったが、水田、牧草地、削平、客土のあった場所は調査の実施ができなかった。しかし、昭和57・58年度の荒砥北部土地改良事業に伴う発掘調査で、隣接する区域の調査が実施されているため、ある程度の予測ができた。

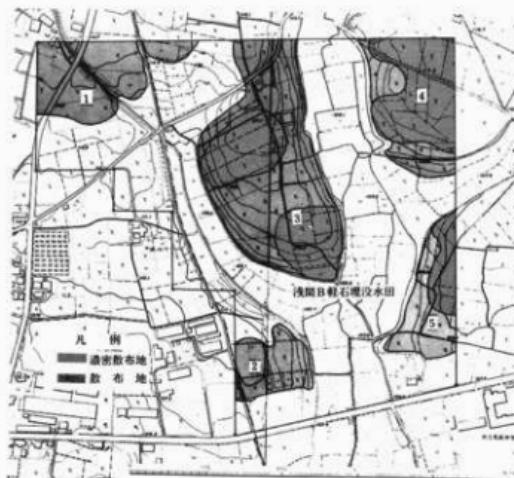
本地区は赤城山南麓の末端部に位置しており、利根川の第3次支流である宮川によって開拓を受けており、更に深掘による開拓された小支谷によって台地が大きく4ヶに分けられる地形を呈している。便宜的に住宅団地造成地を遺跡群としてとらえる近視眼的な見方をしているが、調査終了後には、遺跡・群の再編成を微視的あるいは巨視的に検討しなければならないことと考えている。

まず、各地籍毎に採集された遺物は水洗後、縄文・弥生・土師器・須恵器・中世以降・その他に分類し、それぞれの数量を数え分布濃度資料とした。今回の分布調査によって得られた資料は2010点を数える。その内訳は縄文土器片19（撚糸文土器、加曾利E式土器）、弥生1点、土師（古墳時代前・中期157点、同後期85点、奈良・平安時代1,345点）、須恵器293点（奈良・平安時代）、砥石2点、石器（剥片）6点、埴輪1点、灰軸2点、中近世陶器93点、不明1点と古墳時代から平安時代にかけての遺物が圧倒的多数を占めていた。

分布の濃淡については面積を換算して密度計算をすべきであったが、便宜的に40片までを散布地とし、40片以上を濃密散布地とした。最も多い所で一筆あたり672点の遺物が採集されている。これらの分布を見ると中央の台地と東の台地に集中した散布が認められた。No3の北側には、古墳時代の遺物が集中しており、南側には奈良・平安時代の集中、東の台地であるNo4、No5からも奈良・平安時代の遺物の集中が見られた。

次に採集された遺物から各時代毎の分布状況を追ってみよう。

先土器時代 採集された資料はない。しかし、今井町北三木堂遺跡、荒子町川龍皆戸遺跡などや赤堀村石山遺跡、牛伏遺跡などから発掘によって資料が検出されている。立地的条件からみても、存在の可能性は高く、また地下数mという深さのため調査の際、十分な注意を要する。



第2図 遺物分布区域図

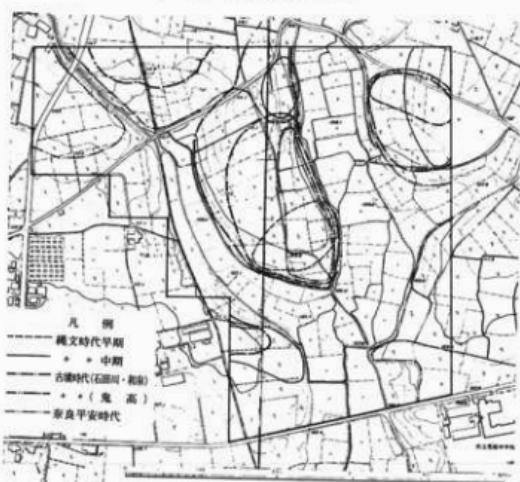
縄文時代 草創期と考えられる撚糸文土器がNo 3の台地先端から見つかった。中期加曾利E式土器がNo 2、No 3、No 4から数点認められた。

弥生時代 櫛描波状文のある破片が1点見られたにすぎない。しかし、No 5に隣接する調査で竜見町期の住居址が検出されているため、その存在も考えられる。

古墳時代 墓墓はNo 3の北端に2基調査され、そのうち1基の石室半分は本事業内に位置しており、古墳群の広がりが考えられる。集落はNo 3の台地中央部に集中する傾向が見られ、No 4にも存在が推察される。

奈良・平安時代 No 3、4、5からまとまって遺物が採集されている。特にNo 3・4の隣接地の調査では平安時代の集落が検出され広がりが考えられる。

生産遺構として浅間B・C軽石による埋没水田跡の存在は、本区域の南側から



第3図 時代分布図

B軽石層埋没水田が検出されていることから、谷地水田跡の存在が予想される。

以上、事業区内の散布地はNo 1～5を合計すると、約110,000m²と広範囲で更に、未調査区域を含めるとこの数字を上まわるものとなる。

(前原 豊)

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査するにあたり全区域を共通したグリッドを用いた。グリッドは $4 \times 4\text{ m}$ を基本とし、南北を x 軸、東西 y 軸とした。各グリッドは、北西隅を基点とし、 $x = \text{算用数字}$ 、 $y = \text{算用数字}$ と呼称した。

調査は、トレンチにより遺構確認を行なった。トレンチは、幅 1.2 m とし、東西方向に走るトレンチを 20 m 間隔で、南北に走るトレンチを 100 m 間隔で設定した。また、各トレンチの遺構確認後、特に遺構・遺物の分布が少なかった諒訪、頭無両遺跡では、東西のトレンチを更に増やし、 10 m 間隔とした。遺構確認は、基本土層第Ⅲ層上面で行なった後、各遺跡ごとに地点を選択して旧石器時代の遺物・遺構を深査した。遺構確認調査後、遺構配置図を $1/100$ の縮尺により実測を行なった。また、土層セクションは、東西・南北ともに 100 m に 1 本の割合で実測を行なった。遺物は、グリッド単位で一括取り上げを行なった。

旧石器時代の遺構・遺物は、トレンチにより関東ローム層暗褐色帶下面まで試掘を行なった。試掘トレンチは、 $1 \times 3\text{ m}$ のトレンチを基本とし、 3 m の長さの内 1 m を安全のため階段部分とした。また、一部のトレンチでは層位確認のため、中部ローム層中に存在する鹿沼輕石層まで掘り下げを行なった。

(折原)

第2節 標準土層

本遺跡群内の地形は、谷部と丘陵部と大きく2つに分かれ、両者の土層堆積状況に大きな差が認められる。丘陵部は谷により4ヶ所の台地に分かれ、各台地に下鶴谷、柳久保、諒訪、中鶴谷頭無の各遺跡が存在する。これらの遺跡は、ともに共通した土層堆積状況が認められ、各遺跡を共通した標準土層として把握できる。他方、谷部の柳久保水田遺跡は、全く異なる土層堆積状況が認められる。

○丘陵部における基本土層は次の通りである。

標準土層第Ⅰ層 暗褐色土。粘性、しまりとともに悪い耕作土。

標準土層第Ⅱ層 黒色土。径 $3 \sim 5\text{ mm}$ の二ツ岳系の輕石を多量に含む。粘性は悪く、しまりは良好である。古墳時代以後の遺物包含層である。

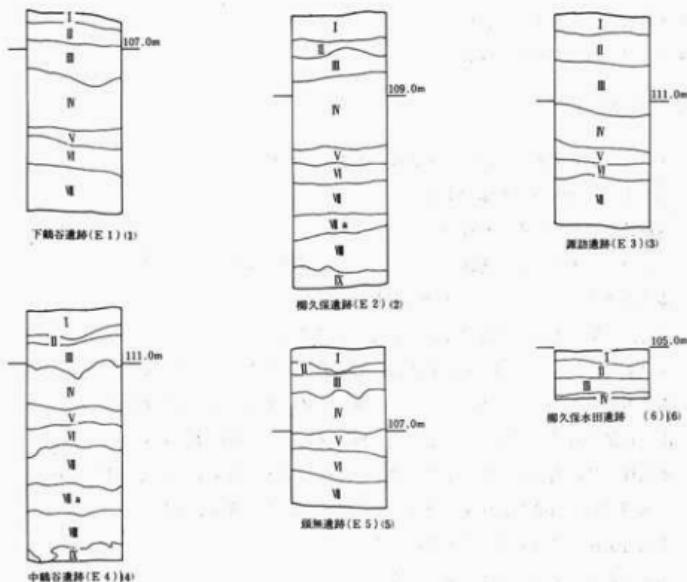
標準土層第Ⅲ層 暗褐色土。斑状に暗褐色土が認められ、少量のローム粒、ローム塊を含む。粘性、しまりとともにやや良好である。縄文時代遺物包含層である。

標準土層第Ⅳ層 ローム層である。褐色を呈し、粘性悪く、しまりは良好である。径 1 mm 以下の白色粒を多く含む。

新 橋 市



第4図 トレンチ設定図



第5図 標準土層図

標準土層第V層 ローム層である。黄褐色を呈する。B Pをブロック状に含む。粘性悪く、しまりは良好である。

標準土層第VI層 ローム層である。黄褐色を呈する。若干、B Pの混入が認められる。粘性やや良好、しまりは良好。

標準土層第VII層 ローム層である。暗褐色を呈する。黒色スコリア、白色粒を少量含む。粘性良好、しまり悪い。

標準土層第VIIa層 ローム層である。第VII層より若干明るい暗褐色を呈する。黒色及び赤色のスコリアを含む。粘性良好、しまり良好である。

標準土層第VIII層 ローム層である。第VII層に色調、含有物は類似するが、粘性がやや悪く、しまりが大変良好となる。

標準土層第IX層 八崎軽石層である。黄色軽石の純層である。

○柳久保水田遺跡の標準土層は次の通りである。

標準土層第I層 暗褐色土。粘性、しまりともに悪い耕作土。

標準土層第II層 灰褐色土。径1~5mmの褐色粒を含む。上部に酸化鉄の沈着層が認められる。粘性良好、しまり良好。

標準土層第Ⅲ層 黒褐色土。白色粒を多く含む。粘性、しまりともに良好。

標準土層第Ⅳ層 浅間山B軽石純層。

第3節 調査日誌

昭和59年10月1日より開始し、昭和60年2月6日をもって終了した。

- 10月1日 本日より、発掘調査を開始する。
- 10月3日 各遺跡の現況写真撮影を行なう。
- 10月4日 作業員導入する。諏訪遺跡よりトレンチ設定部分の草刈りを開始する。
- 10月12日 諏訪遺跡よりトレンチ設定部分の表土排土を開始する。
- 10月16日 調査区全域のトレンチ設定部分の草刈りを終了する。
- 10月25日 本日より、トレンチ内における遺構確認作業を諏訪遺跡から開始する。
- 11月1日 諏訪遺跡より、トレンチのセクション及び遺構の平面図の実測を開始する。
- 11月7日 諏訪遺跡の遺構確認作業を終了する。柳久保遺跡の遺構確認作業を開始する。
- 11月12日 柳久保遺跡の遺構確認作業を終了する。下鶴谷遺跡の遺構確認作業を開始する。
- 11月13日 下鶴谷遺跡の遺構確認作業を終了する。頭無遺跡の遺構確認作業を開始する。
- 11月14日 中鶴谷遺跡の遺構確認作業を開始する。
- 11月15日 頭無遺跡の遺構確認作業を開始する。
- 11月19日 中鶴谷遺跡の遺構確認作業を終了する。
- 11月21日 柳久保水田址の遺構確認作業を開始する。
- 12月3日 調査区域内のトレンチ設定部分の表土排土を終了する。
- 12月6日 本日で柳久保水田址の遺構確認作業を終了し、トレンチ内における遺構確認作業を終了する。
- 12月7日 航空写真撮影を行なう。
- 12月8日 下鶴谷遺跡より遺構面冷結保護の為の埋め戻しを開始。
- 12月10日 本日より旧石器時代の遺構や遺物を確認する為、トレンチを設定し、 3×1 の試掘トレンチの試掘を開始する。
- 12月14日 頭無遺跡の試掘を終了する。中鶴谷遺跡の試掘を開始する。
- 12月19日 中鶴谷遺跡の試掘を終了する。下鶴谷遺跡の試掘を開始する。
- 12月23日 下鶴谷遺跡の試掘を終了する。柳久保・諏訪遺跡の試掘を開始する。
- 12月29日 本日で柳久保・諏訪遺跡の試掘を終了により、旧石器時代の遺物を確認する為の作業を終了する。調査区域内の遺構の埋め戻しを終了する。
- 1月30日 野外での作業を終了し、残務整理に入る。
- 2月6日 本日の残務整理の終了により発掘調査を終了する。

(近江屋)

第4章 各遺跡の概観

第1節 下鶴谷遺跡

本遺跡は、柳久保遺跡群内の南部に位置する台地上に存在する。本台地の東側は、宮川の本谷が、また北側には宮川の支谷がそれぞれ存在する。そのため、東斜面は急な傾斜をもち、北斜面は崖となっている。また、台地頂部は東方へゆるやかに傾斜する平坦面となっている。

調査は、南北方向に走るトレンチをX=100に沿って1本、東西方向に走るトレンチをY=155～Y=190にかけて20m間隔で8本を設定し、標準土層第Ⅲ層上面において遺構確認を実施。旧石器時代の遺物・遺構の試掘トレンチは、Y=165、Y=170、Y=175の各トレンチに9ヶ所を設定調査している。

確認調査の結果、多数の遺構・遺物が存在することが認められる。しかし、調査区南部は大きく削平を受けており、遺構・遺物は皆無である。この地域はY=180～190、X=95～110の範囲に相当する。

遺構の分布（付図1）

本試掘調査では奈良・平安時代の土塙10基、性格不明の落ち込み（倒木址、擾乱を含む。）60基を検出している。ともに調査区に散在して分布している。縄文時代の遺構は土器の出土量より存在が予想されるが、縄文時代の遺構確認面まで掘り下げていないため不明である。

遺物の分布（付図3、4）

遺物は、縄文時代早期、前期、中期の土器および石器、奈良・平安時代の土師器および須恵器中世以後の陶器が出土している。これら遺物の主体となるのが、縄文時代前期の土器である。

縄文時代早期は条痕文系の土器が4点出土している。

前期は黒浜式1点、諸磯式64点が出土している。諸磯式は、調査区全域に分布しているが、特に調査区南西部に集中している。

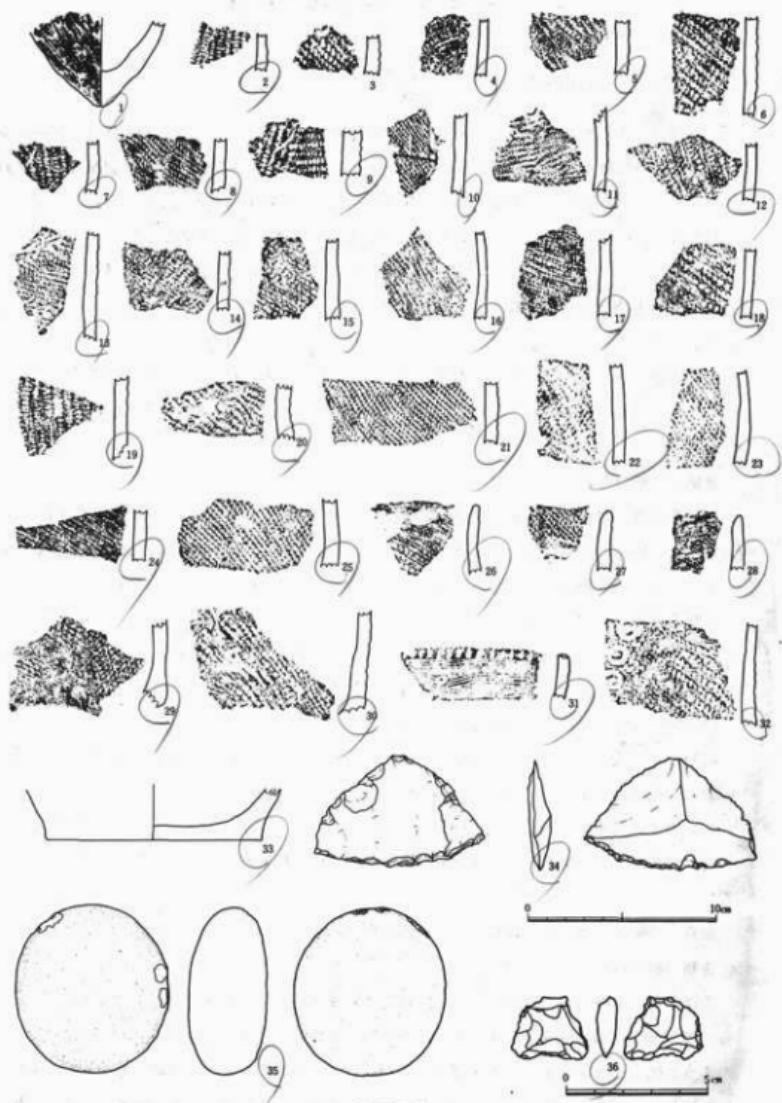
中期はX=97-Y=165より加曾利E式が1点出土している。

石器は石鏃1点、磨石1点、スクレバー1点、剥片類16点が出土しており、調査全域に散在する。

奈良・平安時代は、土師器15点、須恵器1点が散在して出土する。

遺物（第6図）

1は条痕文を有す尖底土器である。2は胎土に纖維を含み、斜縄文を施文する黒浜式土器である。3～30は全面に縄文が施文され、色調が明赤褐色を呈す諸磯式土器である。本遺跡では、このような縄文を施文するだけの土器が主体を占めている。9のような斜縄文を羽状に配す例も認められるが、極く僅かである。31、32は竹管文が認められ、竹管文が施文された土器はこの2点のみである。31は口唇部に刻目を、口縁部以下に竹管による平行沈線文を肋骨状に配する。32は



第6図 下鶴谷遺跡出土遺物

R L の斜縄文に円形竹管文を施文する。33は諸磯式土器の底部で無文である。33~34は石器である。34は横井剥片を用いたスクレバーである。35は磨石である。36はチャート製の石鎌で、先端部が欠損している。

? 34~35 ではないのか?

(折原)

第2節 柳久保遺跡

本遺跡は柳久保遺跡群内の中央部に存在する台地上に位置する。本台地は東側にある宮川の本谷と西側にある宮川の支谷に挟まれた舌状台地である。南面、東面、西面はゆるやかな傾斜をもっている。また、本遺跡北西部は深い谷状の地形となっている。隣接する諏訪遺跡とは深掘と呼ばれる掘により分けられる。

調査は南北方向に走るトレンチを $X = 50, X = 65, X = 70, X = 75$ に設定し、 $Y = 125$ よりも南方の $X = 95 \sim 120$ には 20m 間隔で 6 本設定している。東西方向に走るトレンチは $Y = 65 \sim 135$ に 20m 間隔で 15 本設定する。旧石器時代の遺構・遺物の調査は $x = 65, 70, 75, 85, 100, 105, 110, 115, 120, y = 70, 85, 90, 110, 115, 120, 125, 135$ に 91 カ所の試掘トレンチを設定調査している。

確認調査の結果、調査区全域に遺構・遺物の分布が認められ、特に南部および中央部、北西部に遺構・遺物の密な分布が認められる。検出された遺構は古墳時代から奈良・平安時代の時期が主体となるが、縄文時代の遺構も少数検出されている。遺物は旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の土器、石器が出土している。

遺構の分布（付図1、2）

本遺跡では、縄文時代の土塙 6 基、古墳 2 基、古墳時代から平安時代にかけての住居址 16 基、窪状遺構 2 基、道跡 1 条、性格不明の落ち込み（倒木址、擾乱を含む。）91 基が確認されている。

縄文時代の遺構は $X = 100$ より西方に分布している。これらの土塙はローム層（標準土層第IV層）上面で確認されている。そのため、古墳時代以後の遺構確認面である標準土層第III層までしか掘り下げていない地区の分布状況は不明である。しかしながら、標準土層第IV層まで掘り下げた面積が少ないにもかかわらず、土塙 6 基検出されたことにより、多くの縄文時代の遺構の存在が予想される。

古墳時代から平安時代にかけての住居址は調査区南部、中央部、西北部の大きく 3ヶ所に分布の集中が見られる。調査区南部はゆるやかな傾斜をもつ南斜面である。この南斜面の $X = 110 \sim 125 - Y = 125 \sim 143$ に囲まれた範囲に住居址が 8 基確認される。住居址は遺物より奈良・平安時代の所産と考えられる。調査区中央部は $X = 95 \sim 110 - Y = 90 \sim 110$ に囲まれた台地頂から東斜面にかけ住居址 7 基が検出されている。住居址の時期は出土遺物より古墳時代から平安時代にかけてと考えられるが、詳細は不明である。調査区西北部は深い谷状地形に面した東斜面に位置する X

=70-Y=70に住居址3址が存在する。出土遺物が無いため詳細な時期は不明である。

古墳は調査区西北部のX=60-Y=65およびX=73-Y=60の2ヶ所に確認されている。両古墳は昭和59年に群馬県教育委員会により一部調査されており、すでに調査部分は削平されて道路になっている。

窯状遺構はX=66-Y=85およびX=77-Y=95に各1種が存在する。ともに覆土上部が浅間山B軽石に覆われており、覆土中には多量の炭化物が含まれている。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

性格不明の落ち込み（倒木址、攪乱を含む。）は調査区全域に散在する。

遺物の分布（付図3、4）

遺物は旧石器、縄文時代早期、前期、中期の土器および石器、古墳時代から平安時代にかけての土師器および須恵器が出土している。この内、古墳時代から平安時代にかけての土師器が主体となっている。

旧石器はX=70-Y=69の暗褐色帶（標準土層第Ⅴ層）より剥片1点が出土しており、この他には出土が認められない。

縄文時代早期はX=75-Y=78およびX=75-Y=94より条痕文系土器の細片が1点出土したのみである。

縄文時代前期の土器は黒浜式3点、諸磯式7点が出土している。分布の集中は存在しない。

縄文時代中期の土器はX=105-Y=110より3点、X=96-Y=120 X=115-Y=144から2点が出土しており、加曾利E式である。

石器は石斧6点、スクレバー1点、剥片類21点が出土し、調査区に散在する。

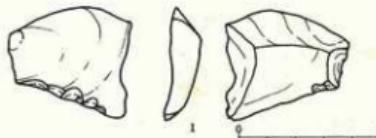
古墳時代の土師器は和泉式と考えられ、総数69点が出土している。分布状況は調査区中央部のX=70-~110-Y=95-~130の範囲に集中する傾向がある。この遺物の分布は調査区中央部に位置する住居址群の分布とほぼ一致している。

奈良・平安時代は土師器127点、須恵器3点が出土している。遺物の分布状況は調査区南部および中央部に濃密な分布が認められる。調査区

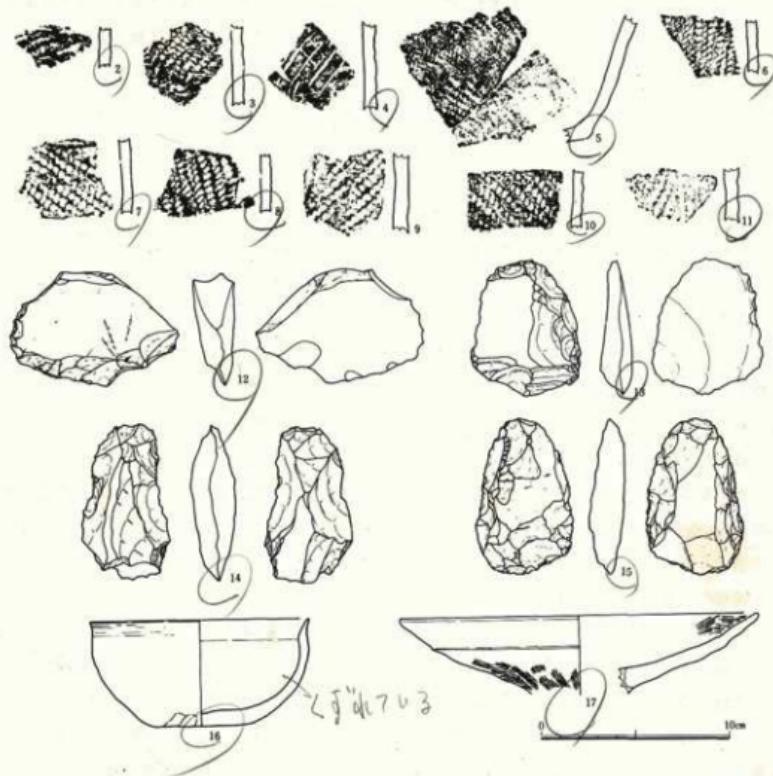
の南部ではX=110-~125-Y=125-~145の範囲に濃密や分布が見られる。調査区の中央部ではX=95-~125-Y=120-~145の範囲に濃密な分布が認められる。調査南部および中央部ともに住居址群の集中とほぼ一致している。

遺物（第7、8図）

1はX=70-Y=69より出土した旧石器である



第7図 柳久保遺跡出土遺物(1)



第8図 柳久保遺跡出土遺物(2)

る。頁岩製の剥片で、当時代の遺物は本点のみである。

2・3は胎土に纖維含み、斜行縄文の見られる黒浜式である。4は沈線による格子文をもつ諸磾式である。5は斜縄文をもつ諸磾式である。6-10は斜行縄文をもち、胎土に砂を多く含む加曾利E式である。11は沈線により縄文と無文部を区画する加曾利E式である。

12は横長の剥片に刃部を調整したスクレバーである。13は刃部が厚いことからスクレバーとも考えられるが、形態的には石斧に類する。14は両面調整を行なった石斧である。15は一部に薄皮面を残す石斧である。

16・17は土師器である。16は壺である。底部は平底、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁

部に横撫で、底部は削り、胴部は風化が激しいため不明である。内面は撫でを施す。色調が明赤褐色、胎土に礫を多く含む。①は壺の壺部破片である。大きく開く体部をもち、口縁部は内湾気味となる。

(折原)

第3節 謙訪遺跡

本遺跡は柳久保遺跡群内の北西部に位置する台地上に存在する。本台地の東側には宮川の支谷が存在し、下鶴谷遺跡とは同一台地上に並ぶ。また、隣接する柳久保遺跡とは深掘りにより分けられている。

調査は南北に走るトレンチをX=25、50に設定し、東西に走るトレンチをY=70~105、Y=125~143に10m間隔で21本を設定確認を行なう。旧石器時代の遺物・遺構はY=85に11ヶ所の試掘トレンチを設定調査する。

確認調査の結果、遺構・遺物の検出が極めて少なく、遺物の集中も認められない。

遺構の分布（付図1）

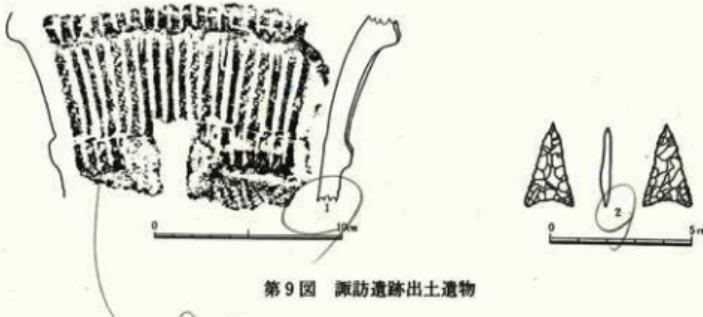
本試掘調査では土塁5基、窯状遺構2基、溝2条、性格不明の落ち込み（倒木址、擾乱を含む。）26基が検出される。これらの内、土塁、窯状遺構、溝は全て古墳時代以後の所産である。遺構の分布はX=30よりも西側に若干のまとまりが見られる。

遺物の分布（付図3、4）

遺物は縄文時代中期の土器3点石器1点、剝片類4点、奈良・平安時代の土師器8点、中世以後の陶器4点である。遺物のまとまりは認められない。

遺物（第9図）

①は深鉢形土器の胴部破片である。隆起線により横帯の区画を構成する。その中をR Lの縄文を4列の帯状に施した後、太い沈線文を継位に配する。胴下部は縄文を羽状に施す。



第9図 謙訪遺跡出土遺物

2はチャート製の石壁で、精巧なつくりである。

(折原)

第4節 中鶴谷遺跡

本遺跡は柳久保遺跡群内北東部に位置する台地上に存在する。この台地は西側に宮川の本谷が、南側に宮川の支谷がそれぞれ存在する。本台地の南斜面はゆるやかな傾斜をもち、西斜面は崖となる。

調査は南北方向に走るトレンチをX=145、150、155に、東西に走るトレンチをY=65~105に20m間隔で設定し確認調査を実施する。旧石器時代の遺構・遺物はY=75、80、85、X=145、150、155に計22ヶ所の試掘トレンチを設定し調査している。

確認調査の結果、多数の遺物・遺構が検出される。遺構・遺物ともに南斜面に集中する傾石が認められ、一方調査区の西部は遺構・遺物ともに分布が少ない。

遺構の分布（付図2）

本確認調査では縄文時代の土塙1基、奈良・平安時代の住居址15址および土塙10基、溝4条、古墳1基、窓状遺構1基、性格不明の落ち込み（倒木址、擾乱を含む。）26基が確認されている。

縄文時代の土塙はX=142-Y=75に存在し、ローム層（標準土層第IV層）上面で確認する。

奈良・平安時代の住居址は南斜面のX=80より南方に集中し、特に斜面下部に多く存在する。この南斜面は柳久保水田遺跡の東部X=110~115-Y=135~160の囲まれた地域に地形がつながっている。さらに住居址群も柳久保水田遺跡東部へ広がっている。以上より、本遺跡大柳久保水田遺跡東部は同一集落と考える。奈良・平安時代の土塙は住居址群の分布とほぼ一致している。

古墳はX=155~160-Y=95に周溝および石室が検出されている。石室は崩れており、地表に石材が散乱している。

窓状遺構はX=140-Y=70に1基確認されている。

溝は標高110mより下方の台地縁辺部に存在する。

遺物の分布（付図3、4）

遺物は縄文時代前期、中期、後期の土器および石器、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土師器および須恵器、中世以後の陶器が出土している。

縄文時代前期は黒浜式6点が南斜面に点在する。

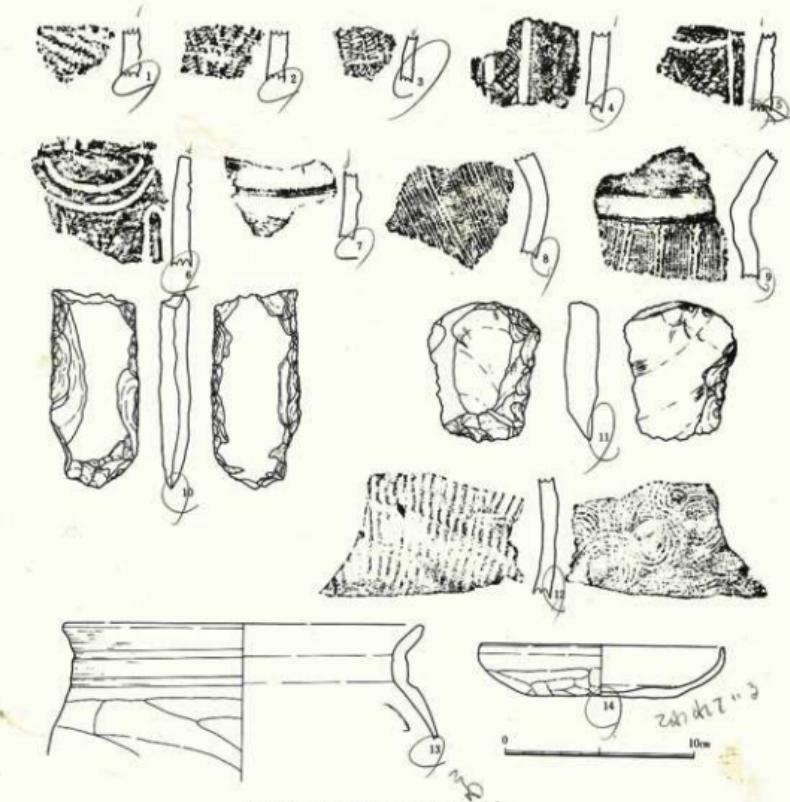
中期は加曾利E式12点が西斜面のX=135~145-Y=70~80の範囲に集中して分布する。

後期はX=143-Y=63に加曾利B式が2点出土している。

石器は石斧2点、剥片類26点が出土しており、台地頂部から南斜面にかけて集中している。

古墳時代の土師器はX=154-Y=95、X=155-Y=65に各一点出土している。

奈良・平安時代は土師器1235点、須恵器180点が出土している。両者の分布は台地頂部より南斜面にかけて集中しており、X=140より西側の斜面は出土量が極めて少なくなる。また、この



第10図 中鶴谷遺跡出土遺物

分布は住居址群の分布と一致する。

遺物（第10図）

1～3は胎土に纖維を含む黒浜式である。1と3は斜行縄文、2は羽縄文である。4～9は加曾利E式である。4は胴部破片である。縦位の沈線により、無文部とR Lの斜行縄文を分けている。5はR Lの斜縄文を施した後、縦位および横位の沈線を施す。6は口縁部破片である。口縁部は沈線による連弧文、胴部は逆U字状に沈線を配する。7は横位に隆線を施す。8と9は同一個体である。条線を縦位に施す。

10は石斧である。頭部を欠損する。11は石斧と考えられるが、あるいはスクレバーかもしれない。片面調整である。

12は菱形須恵器の胴部破片である。外面は平行叩き目、内面は同心円當て目である。13は菱形土師器である。口縁部が残存する。口縁部はコ字口縁を呈す。口縁部は横撫で、胴部は内面が撫で、外面が右か左への斜位の削りを施す。

(折原)

第5節 頭無遺跡

本遺跡は柳久保遺跡群内の東南部に位置する台地上に位置する。本台地は宮川の本谷を西側に臨み、ゆるやかな傾斜をもつ西斜面である。台地の縁辺部は比高2~3mの崖をなしている。

調査はY=123~175にかけて10m間隔でトレンチを設定調査している。旧石器時代の遺物・遺構の調査はY=130、135、140、145に計10ヶ所試掘トレンチを設定調査している。

本試掘調査の結果、本遺跡は遺構、遺物の分布が極めて少なく、若干の住居址や土塙などが検出されたにとどまる。また、X=135~150-Y=165~180に囲まれた地域は削平がひどく、遺構、遺物は皆無である。

遺構の分布(付図2)

本遺跡では縄文時代の土塙1基、奈良・平安時代の住居址4址および土塙1基、近現代の溝1条、性格不明の落ち込み(倒木址、擾乱を含む)15基が検出されている。

縄文時代の土塙はX=152-Y=135より1基検出されている。この土塙には縄文土器1個体が出土している。

奈良・平安時代の住居址は調査区内に散在しており、まとまりは見られない。

奈良・平安時代の土塙はX=159-Y=147より1基検出している。

近・現代の溝は調査区北部の台地縁辺部に存在する。

性格不明の落ち込みは特別な分布は認められない。

遺構の分布(付図3、4)

遺物は縄文時代早期、前期、中期、後期の土器および石器、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土師器および須恵器、中世以後の陶器が出土している。

縄文時代早期はX=150-Y=155より条痕文系土器が2点出土するのみである。

前期はX=161-Y=120より土器1点、X=152-Y=135の土塙より深鉢形土器が1個体出土している。

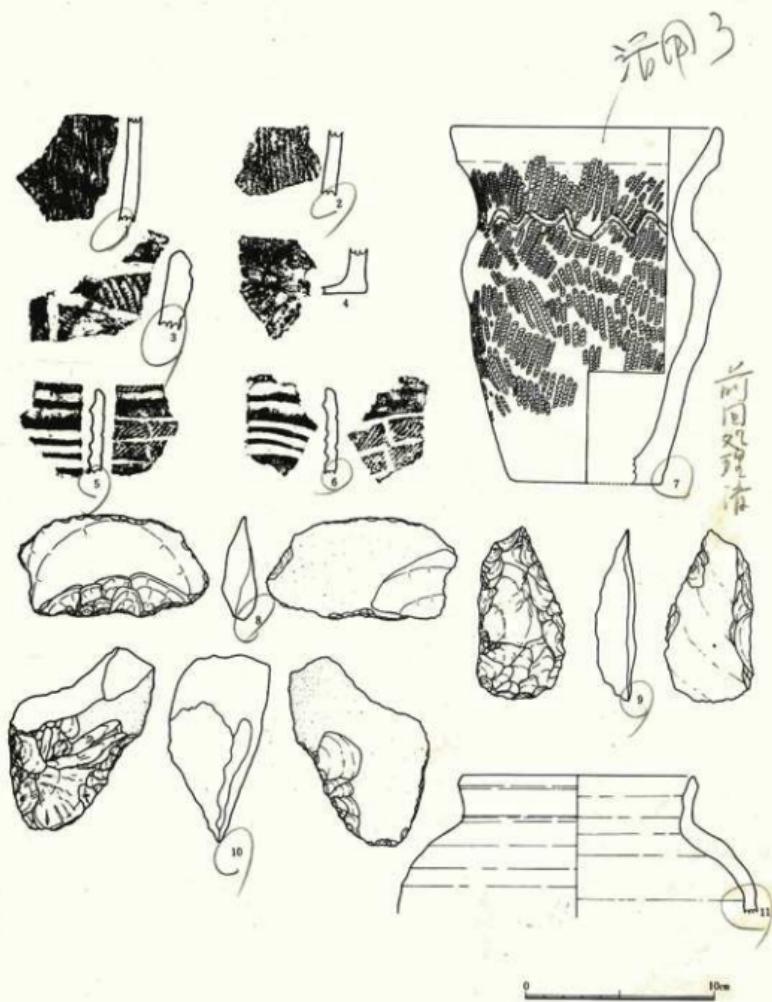
中期はX=140-Y=160に加曾利E式が1点出土している。

後期はX=153-Y=145に加曾利B式が14点集中して出土している。これらの土器片は同一個体と考えられたが、接合はできない。

古墳時代は石田川期の土師器が6点散在している。

奈良・平安時代の土師器および須恵器はX=155~160-Y=140~150に分布の集中が見られる。

遺物(第11図)



第11図 頭無遺跡出土遺物

1と2は条痕文をもち土器で、外面のみ施文される。3は加曾利E式で、太い沈線により区画を構成し、その中に縄文を施文する。4～6は加曾利B式で、同一個体である。4は底部片で、網代痕が見られる。5と6は口縁部片である。外面に縄文を施文した後、沈線により区画を施している。内面は隆線と沈線を横位に配する。7はX=152-Y=135の土塙より出土した深鉢形土器。

器である。口縁部の¹が欠損する。口縁部は無文である。胴部はR Lの繩文を施文した後、頭部に沈線を波状に配する。

8は横長の剥片を用いたスクラバーである。9は片面調整の石斧である。10は頭部を欠損する石斧である。

11は須恵器の壺である。口縁部は短く、直立気味に立ち上がる。

(折原)

第6節 柳久保水田址遺跡

本遺跡は宮川の本谷と西北へのびるおよび東北によりる支谷に存在する。

調査はY=70~185にかけて40mに1本の間隔でトレンチを設定、調査する。遺構確認は浅間山B軽石層を除去した面で行なう。

調査は、東西に走るトレンチをY=65~185に40m間隔で14本を設定、調査する。調査の結果、調査区内全面に浅間山B軽石の純層が認められる。しかし、調査中央部のX=125~145-Y=135~155にかけて広い範囲で攪乱を受けており、遺構の保存状況は悪い。遺構は宮川の本谷において水田址が予想されたが、北西にのびる支谷では遺構は確認されず、北東にのびる支谷では住居址が検出されている。水田址は調査範囲がせまいため、遺構としての確証は得られていない。

遺構の分布（付図1、2）

本確認調査では住居、溝が検出され、宮川本谷では水田址の存在が予想されている。

住居址は本調査区東部の頭無遺跡と中鶴谷遺跡に狭まれた谷部、X=130~165-Y=110~125の範囲に2址検出されている。ともに奈良・平安時代の所産である。住居址は、中鶴谷遺跡の住居址群と同一集落跡に存在したと考えられる。

溝は調査区内の各所に認められ、水田址に付属する施設と考えられる。時期的には平安時代から現代までの様々な溝が検出されている。中でもX=132-Y=125から検出された溝は浅間山B軽石を覆土しており、形態・規模ともしっかりしている。

水田址は宮川の本谷全面に存在が予想されるが、浅間山B軽石下の水田は、現地形の谷幅よりもかなりせまい範囲に存在したと考えられる。

遺構の分布（付図3、4）

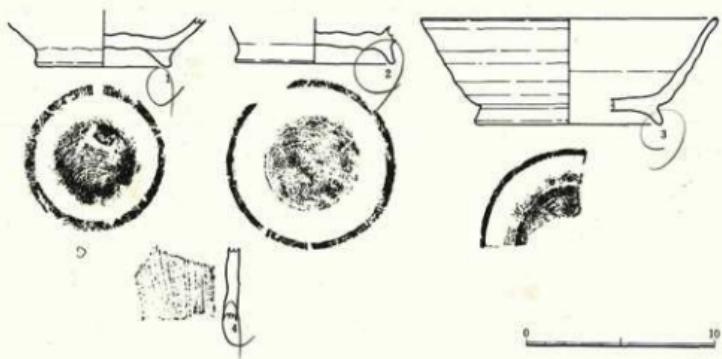
繩文時代の前期の土器および石器が出土しているが、流れ込みと思われ、土器2点と石器3点である。

古墳時代は土師器4点が出土している。

奈良・平安時代は土師器607点、須恵器49点が出土している。遺物の分布はY=100より南部に多く、特にX=135~165-Y=100~125に集中している。

遺物（第12図）

1は須恵器壺底部である。高台をもち、回転糸切り末調整である。2は須恵器壺底部である。



第12図 柳久保水田址遺跡出土遺物(1)

高台をもち、回転糸切り末調整である。3は須恵器
环である。高台をもち、口縁部がやや外反する。底
部は回転糸切り末調整である。

4は陶器である。すり鉢である。

5は文久永宝である。裏面に波文がある。

(折原)

第12図 柳久保水田址遺跡出土遺物(2)



第7節 遺跡別遺物出土量表

表1 下鶴谷遺跡

X	Y	石器	縄文	古墳	奈良	平安	中近世	備考
			早期	前期	中期	後期	和泉石田川	土師器 須恵器 陶器
98	155						1	
105	160	1						
95	165			2				
96	165			3				
97	165						1	
105	165							
112	165	2			1			
95	170						2	
98	170	1						
100	170	1						
101	170	1						
102	170							
105	170	1						
106	170	1						
109	170			1				
95	175						1	
97	175						2	
100	175						1	
102	175							
103	175	1						
105	175	1						
106	175	3		1				
109	175	1						
94	180	1						
95	180							
96	180							
97	180							
100	180							
114	180							
115	180							
108	180							
100	153							
100	163							
100	166							
100	168							
100	169							
100	171							
100	173	2			1			
100	174	1			2			
100	176							
100	177	1						
100	176	明		1				
不					3			

表2 柳久保遺跡(1)

X	Y	石器	縄文	古墳	奈良	平安	中近世	備考
			早期	前期	中期	後期	和泉石田川	土師器 須恵器 陶器
35	70	1					9	
63	70						1	
79	70						1	
70	80						1	
75	80			1			1	
96	80						1	
100	80						1	
102	80	2						
78	95	2						
95	95							
97	95							
98	95							
99	95							
108	95							
112	95							
99	100	1						
101	100							
106	100							
107	100							
108	100							
110	100							
113	100							
85	105	1						
96	105							
98	105							
104	105							
109	105							

柳久保遺跡(2)

X	Y	石器	縄文				古墳	奈良	平安	中近世	備考
			早期	前期	中期	後期					
94	110						9	2			
99	110										
100	110	1		1							
101	110	1									
104	110	2									
105	110										
108	110										
110	110										
94	115										
101	115	1									
95	120										
96	120										
99	120										
108	120										
115	120	1									
116	120	1									
106	125										
110	125	3									
112	125	1									
113	125										
115	125										
116	125	2									
120	125	2									
121	125	2									
123	125	1									
124	125	1									
94	130										
110	130										
115	134										
110	135										
115	135										
120	135										
121	135	1									
115	140										
75	78										
75	94										
95	128										
95	129										
100	94										
100	96										
100	99										
100	104										
100	114										
110	138										
110	139										
110	140										
115	126										
115	127										
115	136	1									
115	137										
115	139	1									
115	140										
115	144										
不	明										
											表採 出土位置不明 1

表3 諏訪遺跡

X	Y	石器	縄文				古墳	奈良	平安	中近世	備考
			早期	前期	中期	後期					
30	65							1			
25	70	1						3			石器 1
33	70										
27	83	1									
44	83										
40	90										
47	90										
48	90										
22	95										
39	97										
26	100										
29	100										
65	100	1									
67	115	1									
74	130										
68	137	1									

表4 中鶴谷遺跡E4 (1)

X	Y	石器	縄文				古墳	奈良	平安	中近世	備考
			早期	前期	中期	後期					
143	65					2		16	9		
150	65							3	23		
151	65							5	1		
152	65							49	1		
153	65							20	2		
145	65							1			
154	65						1				
156	65							11			
157	65							1			
158	65							1			
159	65							8	2		
140	70							1			
143	70	1				2					
145	70							4			
148	70							3			
150	70							4			
151	70							9			
152	70							1			
153	70							23			
154	70							2			
155	70							13	1		
156	70							3			
157	70							7			
158	70	1						10			スラグ 1
159	70							1			
139	75					1		1			
143	75										
144	75							9			
145	75							1			
146	75										
149	75	1									
153	75	1							1		
159	75							5			
134	80							2		1	ホウログ 1
138	80					2				3	
143	80					5					
144	80							117	7		
146	70							14	1		
148	80							21	3		
149	80							6	3		
150	80							9	3		
152	80							1	1		
153	80							11	2		
154	80							3	1		
155	80							2			
158	80							5	1		
148	83					1		23			
137	85							2			
138	85							1			
139	85							1			
140	85							1			
141	85							3			
142	85							5	1		
143	85							2			
144	85							17	2		
145	85							3			
147	85							11			
148	85							2			
149	85							4			
150	85							2			
152	85							2			
156	85							24			
158	85	1						6			
159	85	1						9			
153	88							1			
130	90							1			
131	90										
135	90										
138	90							4			
139	90							1			
141	90							1			
143	90							3			
144	90	1						7			
145	90	1						2			
146	90							6			
147	90							14			
148	90	1						11			石斧 1

中鶴谷遺跡(2)

X	Y	石器	縄文				古墳	新良	平安	中近世	備考
			早期	中期	中期	後期					
152	90			1				19	4		縄文時期不明土器片 1
154	90							6	2		
155	90							5	1		
157	90							1			
154	94							2			
164	94							5			
141	95							1			
142	95							2			
144	95	1						6			
145	95	2						15	1		
146	95	1						12	2		
147	95							2	1		
148	95			1				3	6		
151	95				1			5	2		
152	95							2	5		
154	95						1	1			
155	95	3						13	1		磨石 1
159	95	1						19	3		
149	99							8			
133	100							9			
139	100	1						11	1		スラグ 1
140	100					1		16	1		
141	100							50	8		
142	100							23	1		
147	100	1					1	7	1		
148	100							6	2		
149	100							4	1		
150	100							8	3		
151	100	1						10	1		
152	100							6			
153	100							1	1		
154	100							5	4		
140	105							19			
146	105							36	1		鉄器 6
148	105							43	2		
149	105							2			
150	105							4	2		
151	105							14	1		
153	105							21	4		
154	105							10	10		
155	105	1			1			66	6		縄文時期不明土器片 1
145	92							3			
145	97							3			
150	63							4			
150	67							3	3		
150	71	1						2			石斧 1
150	76								3		
150	78								3		
150	82	1						1			
150	83							2			
150	84	1						4			
150	86							1			
150	87							2	1		
150	88								1		
150	89	1									磨石 1
150	93	2									
150	97							20			
150	98	1						5	1		
150	99							2	1		
150	101	1									
150	102	1						10			
150	103	1						6			
150	104							1	1		
150	106							2			
155	92							30	1		
155	93	3						54	3		
155	97	2									
155	98	1						6	7		
155	99							4	1		
不	明										表記 出土位置不明

表5 頭無遺跡

X	Y	石器	縄文				古墳 和泉石田川	奈良 土師器	平安 須恵器	中近世 陶器	備考
			早期	前期	中期	後期					
161	120	1			1			1	5		
163	130							1			
155	133	1									
158	135	1									
150	140	1									
156	140	2					1				
158	140							1	2	2	
159	140						1	41	8	13	
158	143	1					1	38	1		
159	143										
153	145										
154	145										
157	145										
158	145	1					1				
159	147	1					1	1			
160	147			2						1	
150	155										
140	160										
151	160	1									
151	163	1									
155	163										
159	163										
150	165	2					1				
153	167	1									

表6 柳久保水田址(1)

X	Y	石器	縄文				古墳 和泉石田川	奈良 土師器	平安 須恵器	中近世 陶器	備考
			早期	前期	中期	後期					
135	105							3			
136	105							2			
137	105							8	2		
138	105							26	2	1	
141	105							9			
143	105							2	1		
149	105							7	1		
138	110							3			
142	110							20	6		
144	110	1						24	1		
145	110							158	5		
146	110							32	3		
147	110							1			
148	110			1				44	4		
150	110							1			
152	110							10	1		
153	110							9	1	1	
155	110							16	1		
75	115							1			
143	115							18	2		
148	115							1	1	1	
149	115							7	1	1	
150	115							2			
133	120							1		1	ホウロク 1
151	120								1		
152	120								2		
154	120							1		1	
140	125										
149	125										
123	130								2		
134	130							1		1	
138	130								1		
139	130							2		2	
143	130								1	1	
145	130										時期不明土器片 2
126	135							1		1	古銭 1
128	135								6	5	ホウロク 3
135	135								1	2	
136	135								1	1	
138	135								2	1	
140	135								1	1	
141	135								16	5	
143	135								1	2	
109	145									1	
114	145							2		1	
115	145							1	5	1	

柳久保水田址(2)

X	Y	石器	縄文				古墳 相模石田川	奈良 土師器	平安 須恵器	中近世 陶器	備考
			早期	前期	中期	後期					
122	145	1						1			
133	145							1		1	
134	145									1	
139	145										
143	145								1		
120	155	1									鉄器 2
125	155							1			
137	155							1			
117	155							2			
120	175							1			
136	175							1			
120	185									1	ホウロク? 1
123	185							10			
127	185							1			
150	106							4			
150	107							2			
150	111							111	9		常滑? 1
150	118							3			
不	明							22	1		表採

第5章 まとめ

確認調査の結果、旧石器時代から中近世に至る遺構、遺物が検出された。各遺構、遺物は遺跡により分布が異なり、さらに時代別によっても変化が認められた。また、本確認調査では縄文時代の遺物包含層（標準土層第Ⅲ層）上面までとしたため、縄文時代の遺構の確認は極く少数にとどまり、その分布状況も明らかにできなかつた。しかしながら、多量に縄文土器等の遺物が出土していることより、かなりの遺構が存在していると予想された。これらのこと考慮に入れて、各遺跡を概観すると下記の通りとなる。

下鶴谷遺跡

縄文時代は前期を主体として、多くの遺物が出土し、これにより集落跡の存在も予想される。この他に縄文時代早期、中期の遺物も検出されている。奈良・平安時代は少數の住居址および土塙が存在すると考えられる。

柳久保遺跡

縄文時代は遺物出土量においてやや少ないが、宮川の北西の支谷に面して土塙が分布していることから、この周辺に土塙が集中する可能性がある。古墳時代は調査区中央部の台地頂部に遺物遺構ともに集中しており、集落址が予想される。奈良・平安時代は調査区南部および調査中央部東斜面、調査区北西部の東斜面に集落址が存在している。

諏訪遺跡

本遺跡は、遺物出土量、遺構検出量も少なく、また遺構、遺物の分布上のまとまりも認められていない。遺構、遺物ともに少數散在しているにすぎない。

中鶴谷遺跡

縄文時代は調査全域に遺物が分布しており、土塙の存在も確認されることから、かなりの遺構が存在すると考えられる。また、縄文時代中期の西斜面に集中することより、当時期の住居址も存在する可能性がある。奈良・平安時代は南斜面に多数の住居址が検出され、大規模な集落跡が存在したと思われる。

頭無遺跡

縄文時代は遺物出土状況、遺構の存在より、土塙群が存在すると思われるが、量的にはさほど多いとは考えられない。奈良・平安時代は、住居址が若干散在しているにすぎない。

柳久保水田遺跡

宮川本谷部分では浅間山B軽石降下前の水田址が存在する予想される。東北へのびる支谷では中鶴谷遺跡の継ぎと考えられる奈良・平安時代の集落址がある。北西へのびる支谷には今回、何も検出されていない。

このように各遺跡とともに遺構、遺物の存在が認められたが、遺跡の範囲について若干の問題を残した。まず、諏訪遺跡については遺構、遺物の検出が極めて少なく、まとまりも見られない。

その点から調査区全域を遺跡として認めることは困難と考えられた。同様に頭無遺跡も遺物、遺構の分布が少なく、調査区内に小規模な遺跡がいくつか点在している状況と考えられた。

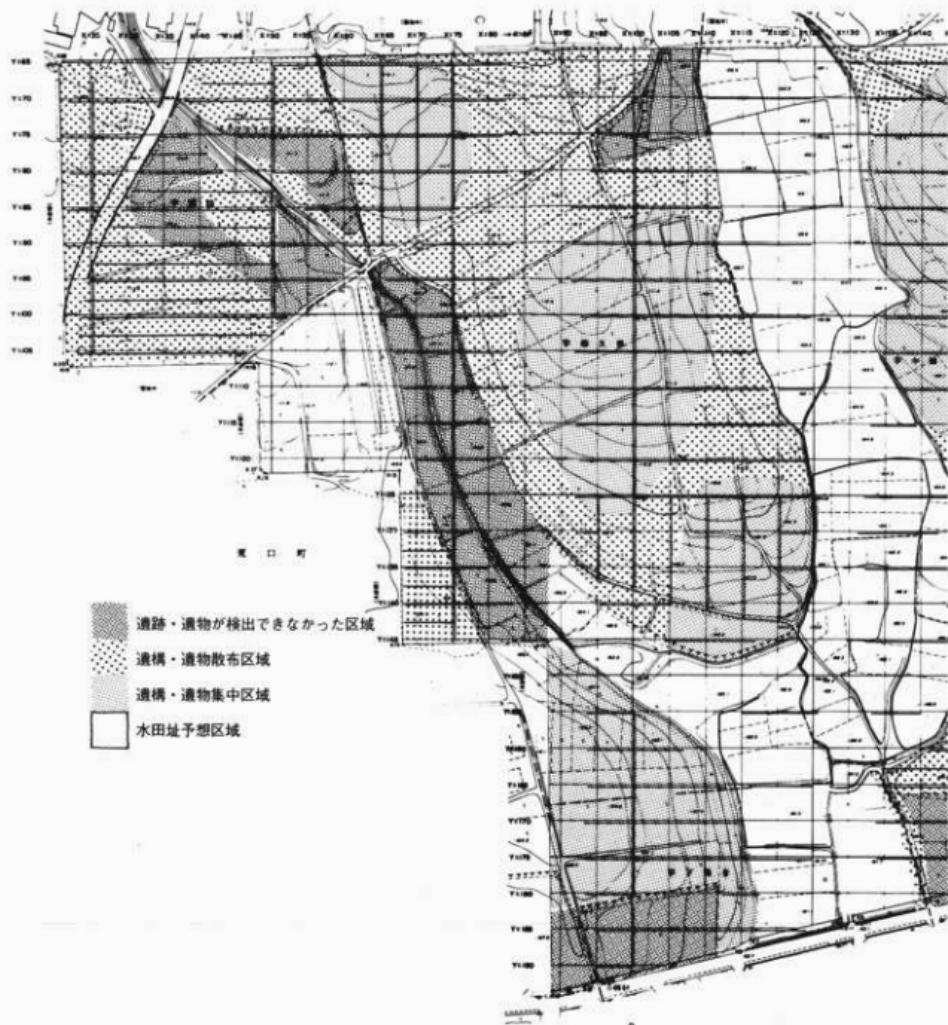
次に柳久保水田遺跡の他の遺跡との境界について触れる。柳久保水田遺跡の東部では明らかに中鶴谷遺跡の集落址の続きと考えられる住居址群が検出されており、むしろ中鶴谷遺跡の一部にすべきと考えられる。今後本調査をする場合、この柳久保水田遺跡東部は中鶴谷遺跡と同時併行で実施されるべきものと考えられる。このような問題は柳久保水田遺跡と柳久保遺跡の境界についてもみられた。柳久保遺跡南部の遺物分布が柳久保水田遺跡の一部に統合しており、また地形的にその延長上に位置することから、柳久保水田遺跡の一部を柳久保遺跡内とするのが妥当のように思われる。

調査工程として次の問題がある。まず、下鶴谷、柳久保、中鶴谷、頭無の4遺跡では縄文時代の包含層と古墳時代～平安時代の包含層が2面存在した。そのため、本調査の段階は遺構確認を2層2回にわたり行なう必要がある。次に柳久保水田遺跡は浅間山B軽石直下の水田址が予想されているにすぎないが、さらに下層の水田址有無については不明である。この点、本遺跡群内には古墳時代～奈良時代の集落が存在しており、同時期の水田も、さらに下層存在する可能性を調査する必要がある。

確認調査の成果は次のページの遺構・遺物の分布区域図（第13図）をもって示めした。

(折原)

南 墓 市



第13図 遺構・遺物分布区域図

写 真 図 版

図版1



調査前全景

図版 2



調査終了時遺跡全景



1 柳久保遺跡（住居址確認状況）



2 柳久保遺跡（住居址確認状況）

圖版 4



1 中鶴遺跡（古墳現況）



2 頭無遺跡（土塙內遺物出土狀況）

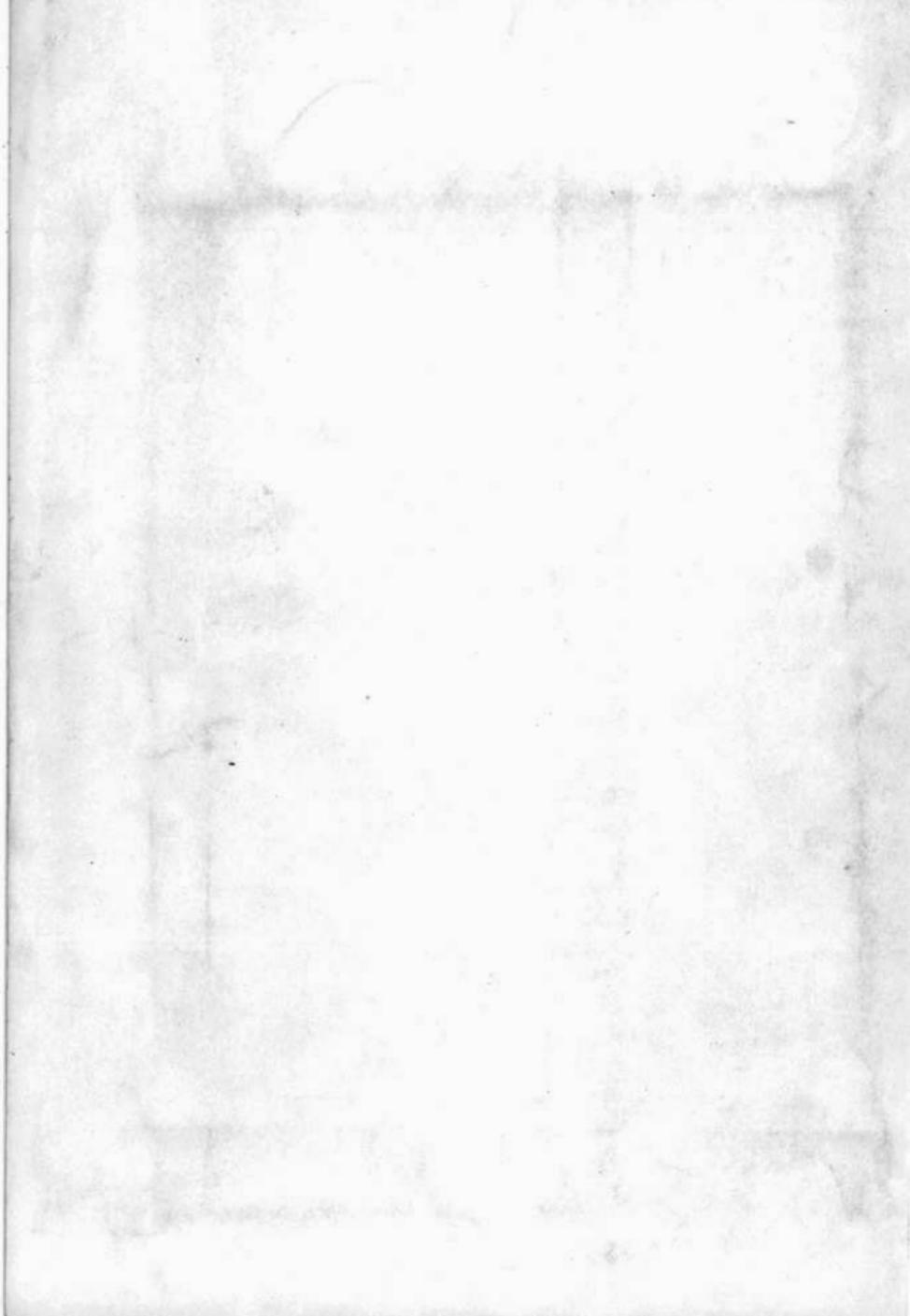
前橋市柳久保遺跡群 II 城南住宅
団地造成地区内確認調査報告書

印 刷 昭和60年3月25日

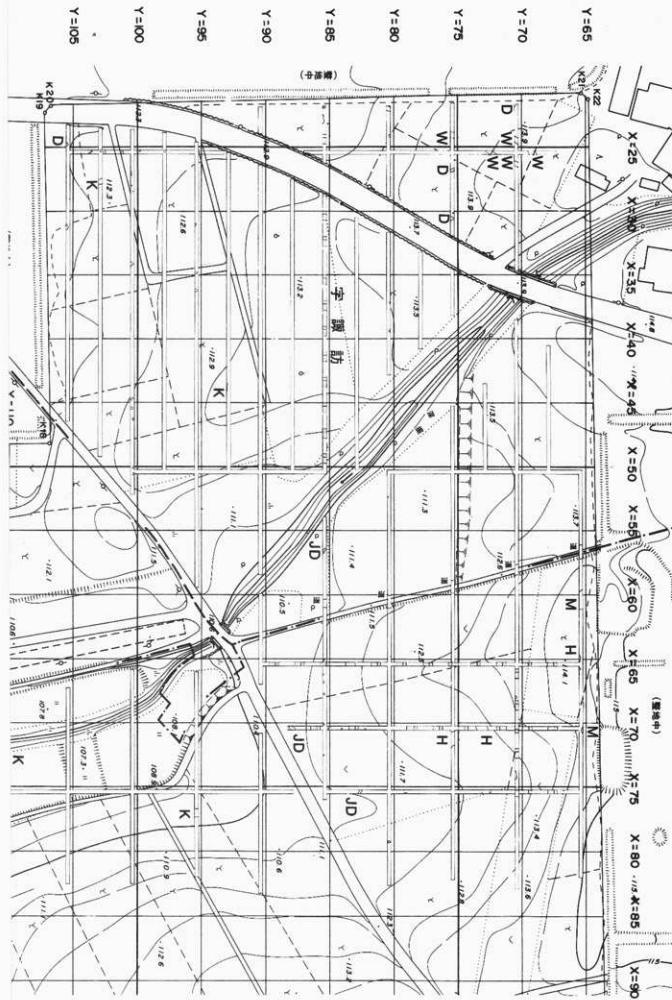
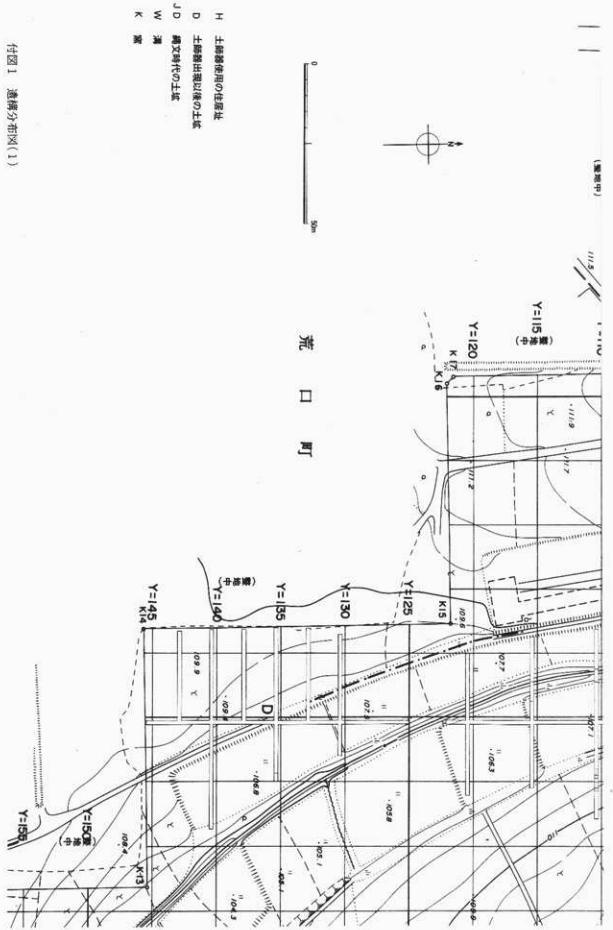
発 行 昭和60年3月25日

編 集 山武考古学研究所
発 行

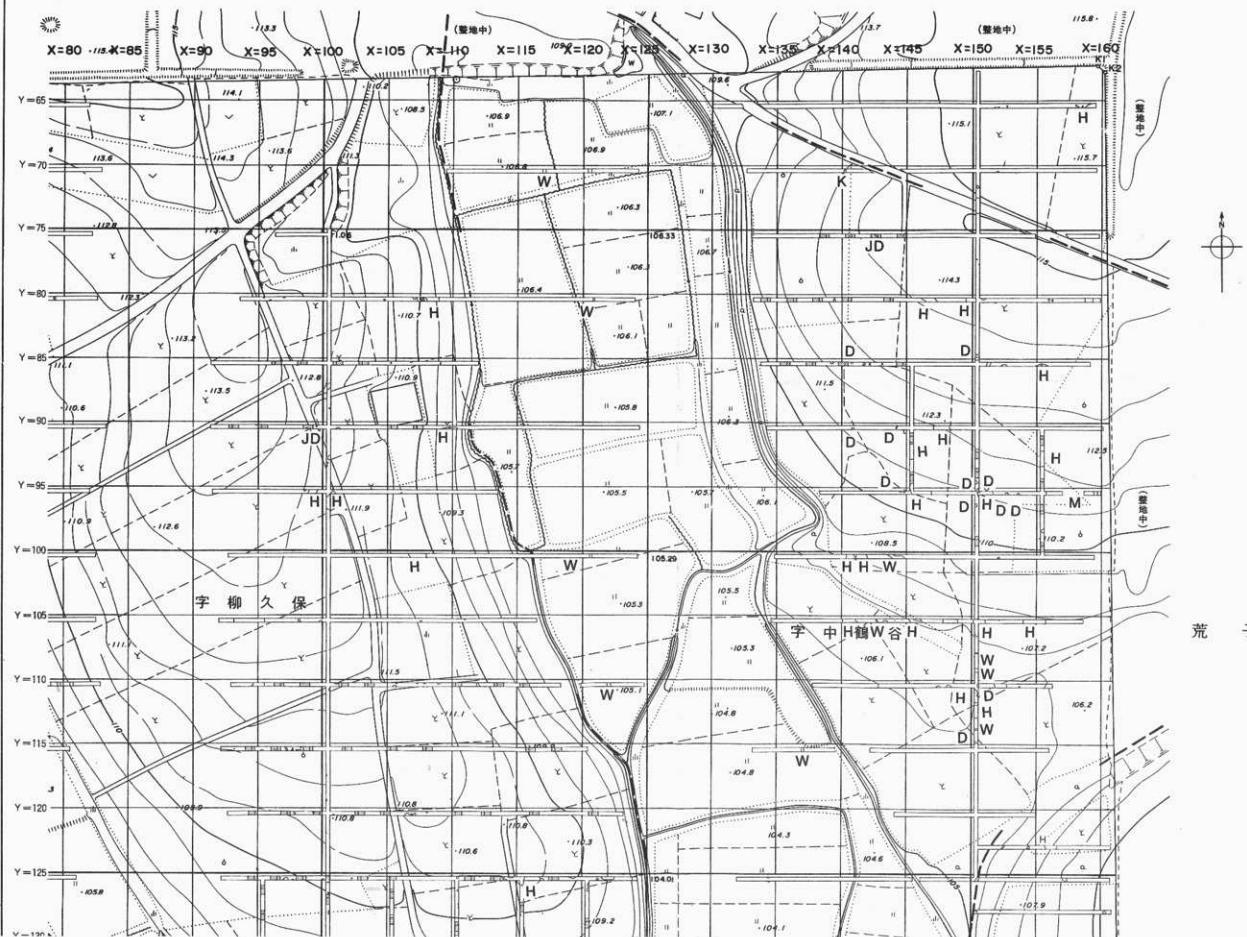
印 刷 株式会社 文化総合企画
製 本 TEL 0476(24)1563

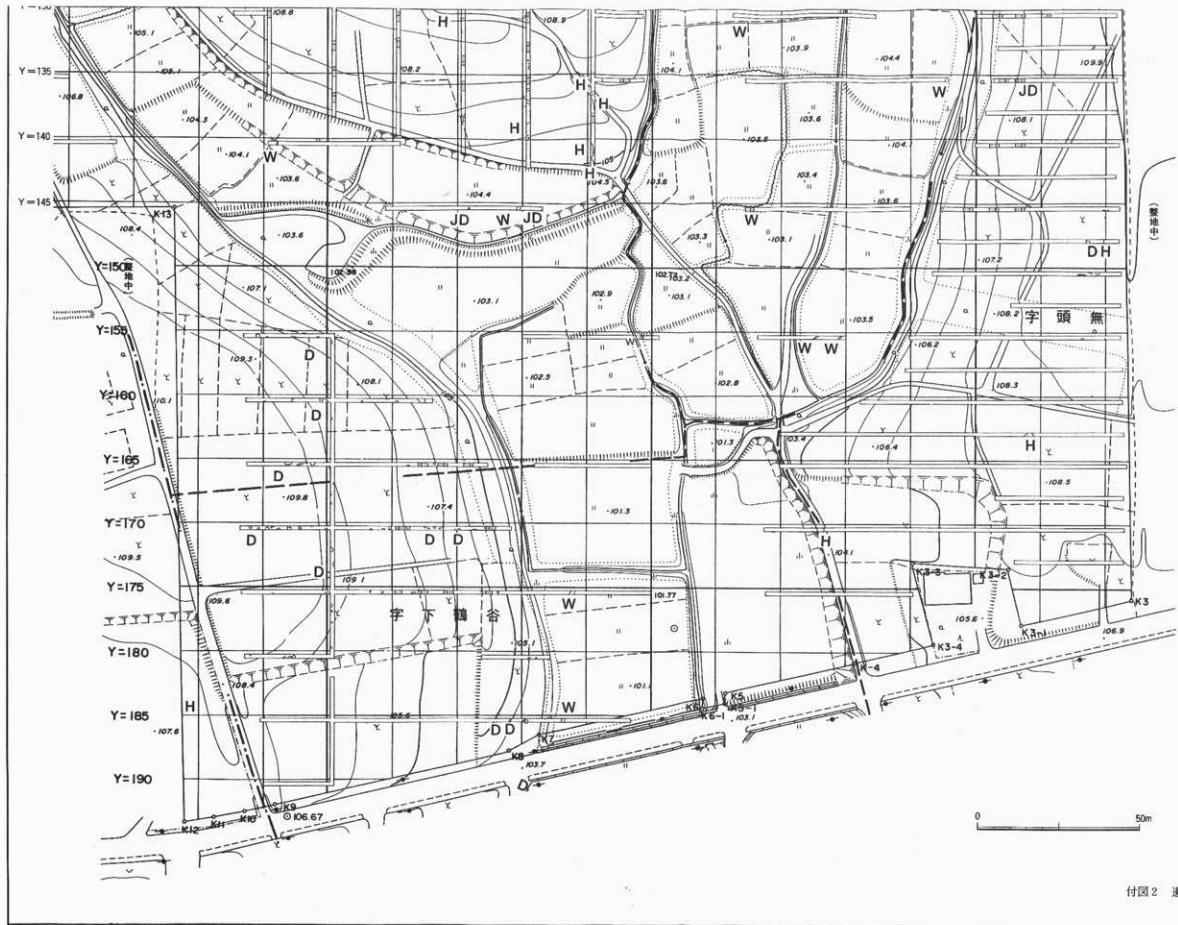


付図 1 透視分布図(1)



前 橋 市



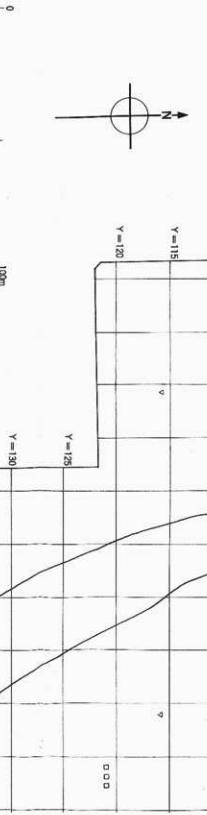
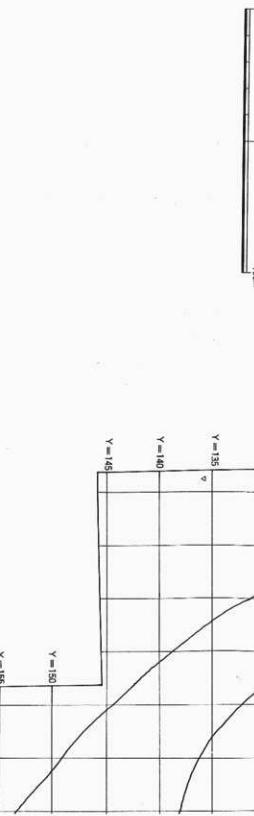


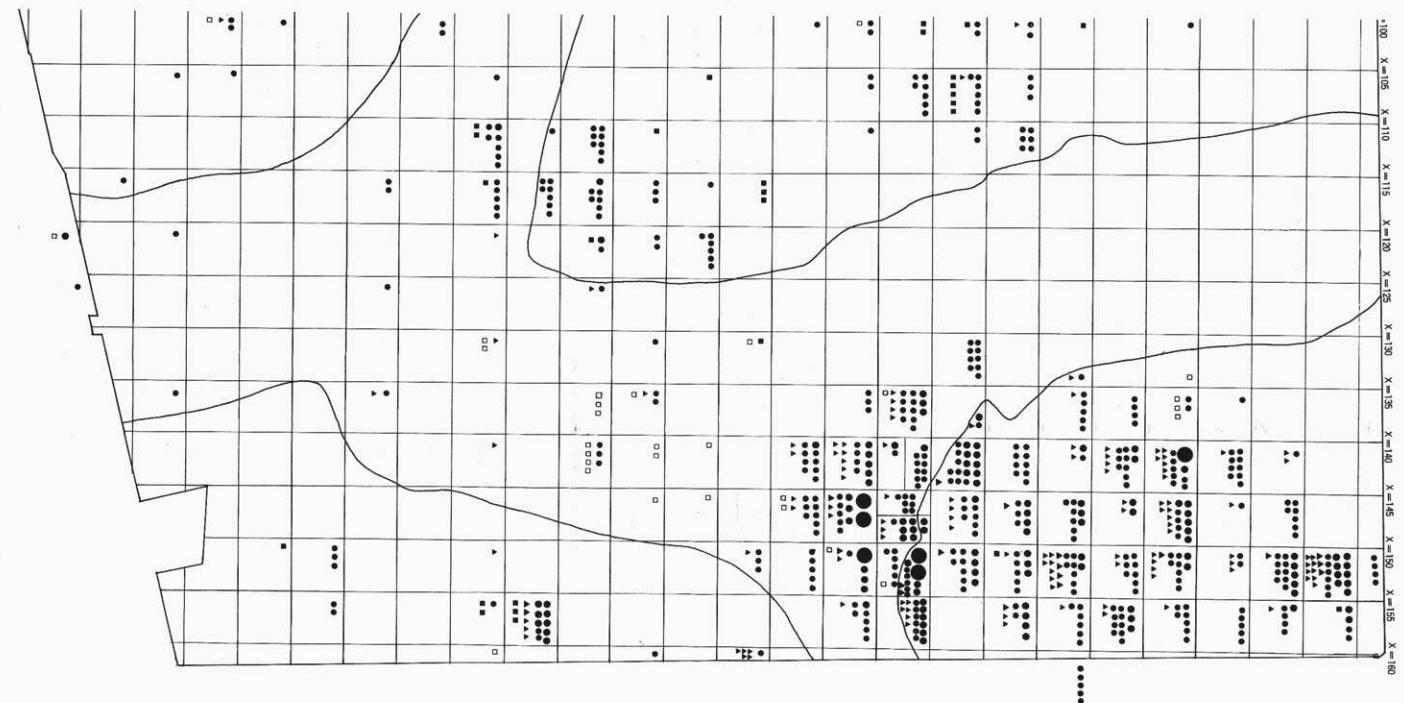
付図2 遺構分布図(2)

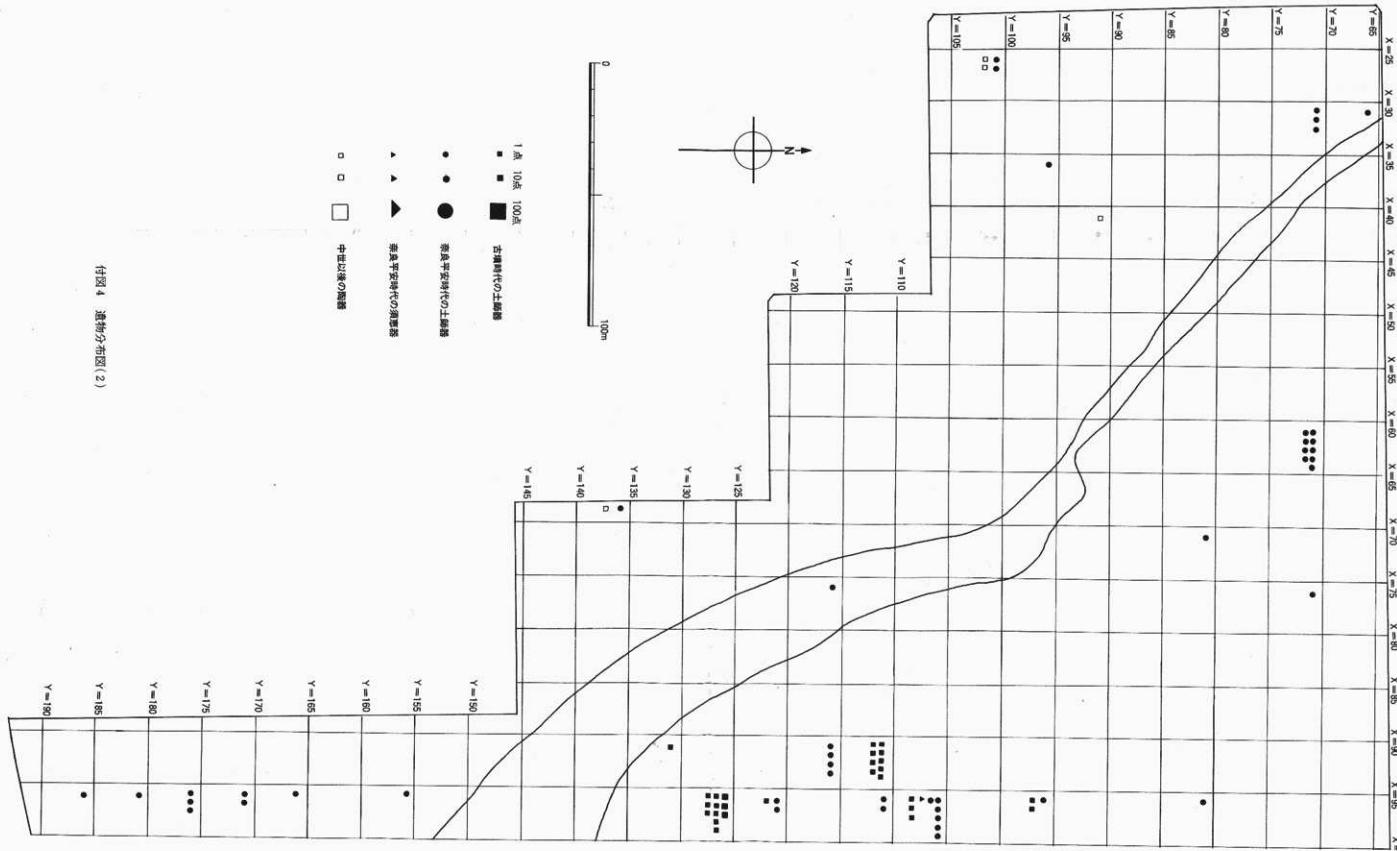
図3 速度分布(1)



1点 10点







付図4 速度分布図(2)

